



作文 2部

もんぶかくだいじんしょう
文部科学大臣賞

稲かりまでの道のり

高知県日高村佐川町学校組合立加茂小学校六年

北添 就登

高知では八月に入ってから雨が降り続き、三日の朝には加茂平野の田んぼは、しん水してしまいました。

しん水した田んぼを祖父は心配して一日中家から様子を見ています。夕方から水が引き始め稲が顔を出しています。今まで水につかっていたので呼吸をしているように見えます。祖父も少し安心した様でやっと笑顔になりました。

台風十一号が接近しています。七日の朝、祖父は決心しました。「台風が来たら稲がたおれるき、今日やるで。」

祖父は朝から少し引きしまった顔に見えます。ぼくも祖父母と一緒に田んぼへ行きました。いつもより少し早目にかかるわせは、まだ少し青いところがあります。今年は雨が多く実の入り方も少なく思えます。八月に入ってから毎日雨が降っているため田んぼの土はかわいていません。コンバインに乗っている祖父は笑顔ではありません。稲がかりにくいだけではなく、祖父の色んな思いがぼくには分かるような気がします。

毎日のように田んぼの見回りをして水の管理をしたり、すずめに食いあらされないよう花火を上げたりしています。田んぼの様子を毎日夕食の時話してくれます。祖父にとって田んぼは、子どものように大切なのです。

去年は日照りが続き田んぼにひびが入りました。今年は逆に日照不足です。まだ少し稲が青い所があるのに、かっってしまうのは祖父は納得できないと思います。

稲をかまでかっている時、祖母はぼくの何倍ものスピードでかっています。ザッザッザとリズムよく聞こえます。ぼくもまねをしてみたいけど、うまくできません。広い田んぼを見わたして、ふちをかるだけでも大変だと思いました。ぼくはかまを持って考えました。

「今、祖父母のためにできることは何だろう。」

少し青い稲を黄金色にすることはできないし、テンポよく稲をかることもできない。でも、一つぶのお米も落さないように丁寧にかかることはできると思いました。祖父母と同じように稲に対する気持ちをそろえていこうと思いました。春から子どものように大切に育ててきた稲をぼくはかまでかると、赤ちゃんをだくように大切に運びました。

稲かりが終わり乾燥機に入ると、祖父母にやっと笑顔がもどりました。雨が降り出す前に昼ご飯も食べずに三時までかりました。一安心です。乾燥機が勢いよくゴーツと音をたてて回り出すと祖父母が

「手伝ってくれてありがとう。」

と言ってくれました。乾燥機の大きな音でかき消されそうだったけど、その声だけはしっかりとぼくの心にも届きました。ぼくは、はずかしいので乾燥機の音にまぎれるように、

「ごちそうさ。」

と言いました。